

図書名	受験番号	氏名
たったひとつのたからもの		

加藤秋雪くんは、生まれてすぐに心臓病とダウン症だと医者に言われた。生後一か月で、余命一年だと宣告されたが、六年間も生きることができた。その六年間について書かれている本だ。

秋雪くんは、風邪をひいたり、虫菌になったりして、菌に感染すると命を脅かす危険がある。お母さんは、秋雪くんが菌が移らないかという不安を抱えていたが、親子教室や機能訓練があり、さらにアウトホームな雰囲気でも好感をもち、いずみの学園へ入園させることを決めた。園の先生達は秋雪くんの病気のことや体のことを知ろうと一緒に診察を受けた。また、秋雪くんが園で友達と仲良く遊んだりしているところを見ることができ、お母さんの不安もなくなった。いずみの学園に入園したことで、自分の足で体重を支えることができ、さらに立ち続けたし、声を出したりすることが出来るようになり成長した。

この本に載っている秋雪くんやお父さん、お母さんの写真は、ほとんど笑顔だ。毎日が楽しく、幸せな日々だったことが、とても伝わってきた。

秋雪くんが、六年間生きたのは、お母さん、お父さん、いずみの学園の先生たちの支えがあったからだと思う。学園の先生達の秋雪くんに対する対応は、とてもすごいと思った。保育者は、障害をもった子供達の知識や理解が大切だと思った。ただ子供が好きという気持ちだけでは、いけないと思う。周りを見て、一人一人の子供を見ることのできる広い視野や保護者とのコミュニケーションなど様々なことが必要だ。

「人の幸せは、命の長さではないのです。」という言葉に、とても感動した。毎日、一生懸命に生きること、毎日、笑って過ごせることが幸せだと感じた。毎日を大切に、精一杯生きていかねければいけないと考えた。今、毎日楽しく過ごしているのは、周りの人達が支えてくれているからだ」と改めて感じる事ができた。もっと、周りの人達に感謝し、生きていきたいと思った。

私は、この本を読んで、毎日精一杯に生きていくことの大切さを学ぶことが出来た。また、保育者にとって大切なことも学ぶことが出来た。私は将来、保護者の方に安心して子供を預けてもらえるような保育者になりたいと思った。さらに、子供の知識も沢山身に付け、子供達が良い方向に成長するように支援していきたいと考えた。自分の理想の保育者になれるように、頑張りたいと思う。